別表５
⑶

主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	布施　豪嗣

主 論 文 題 名：
石橋湛山の経済理論　自由貿易とナショナリズム

（内容の要旨）

本稿は石橋湛山（1884-1973, 以下湛山）の経済思想を分析することを目的としている。湛山は戦前を代表する自由主義者の 1 人であり、小日本主義やケインズ主義といった思想で一般にもよく知られている。湛山の生涯に関してはこれまで多くの優れた評伝が書かれており、自伝も存在しているので細部は割愛し、ごく簡単な紹介に止める。湛山は 1884 年に日蓮宗の僧侶の家に生まれ、山梨県で子供時代を過ごし、早稲田大学に入学した。早稲田大学哲学科卒業の後は東洋経済新報社に所属し経済ジャーナリストとして活躍し、大正デモクラシーの時代には普通選挙論や、「小日本主義」で知られる植民地放棄論を唱え、帝国主義を批判し、自由主義を擁護する論説を行った。1920 年代後半から 1930 年代にかけては、新平価解禁論や金輸出再禁止論、リフレーション政策論などを唱え、浜口雄幸や井上準之助が推進した為替、金融政策を批判し、ケインズ主義として知られる積極財政論を唱えた。戦後復興期には第一次吉田内閣の大蔵大臣として活躍したが、1947 年に公職追放され、復帰の後には鳩山内閣のもとで通産大臣に就任し、1956 年には内閣総理大臣も約 1 ヵ月間務め、1973 年にその生涯を閉じた。湛山は以上のように戦前は主にジャーナリスト、戦後は主に政治家として活躍した人物であり、その業績は政治思想や経済思想など様々な視点から研究されてきた。

湛山が活躍した時代は変動が激しく、さらに時節に適した論評を求められるジャーナリストや政治家という職業上、一貫した意見表明を湛山に求めるということは、それ自体が不可能とも言えることではある。しかし、湛山が東洋経済新報社に入社してから学んだイギリス古典派経済学を中心に考えることで、ケインズ主義的な政策をどのように構想していったかという面も含めて、湛山の思想に一定の統一した解釈を与えることができるのではないかということが本稿の立場である。また、湛山の経済思想は金解禁論争やリフレーション政策論に注目されがちであるが、古典派経済学からの影響も強調することによって、米穀専売制論や統制反対論などその他の湛山の経済思想も含めた豊かな石橋湛山の経済思想の全体像を確認することも目的となる。

本稿では一章において石橋湛山の経済理論の全体的な分析を行い、その後の各章で個別の政策や時代ごとの思想の分析を行うという構成になっている。

まず第一章においては、石橋湛山の経済理論が分析される。湛山はケインズ主義者として知られているが、過剰生産恐慌説に対する批判や、経済統制に対する反対、生産要素としての労力の重視など、イギリス古典派経済学の影響も多く見られることを指摘し、湛山の経済政策論への影響を論じる。本章では湛山の古典派としての要素を、労働を富の源泉とする考えや、セーの法則に対する態度、財政政策に対する態度などいくつかの点で確認し、それらの要素がどのように湛山の復興構想に影響していたかを確認した。生産の基礎として労力を重視するという考えは湛山の経済思想全体を貫いており、湛山はアダム・スミスを引いて労力が重要であることを強調した。湛山にとって不景気と失業は

主　論　文　要　旨

富の唯一根本の労力を活動させない「人生最悪の浪費」であった。また、労力の重視は「富める国とは、換言すれば其労力を善く働かす国のことであり、貧しき国とは其富を拙く働かす国である」という立場につながり、労働生産性を重視すると同時に、失業の解消を重視する姿勢にもつながるのである。

第二章では湛山の経済思想の源流および形成過程として、田中王堂の思想と、1910 年代の湛山の思想との関連が論じられる。湛山は功利主義など様々な面で田中王堂の思想と共通点があることを指摘し、1910 年代の湛山の思想の関心が必ずしも分配にあるわけではなく、むしろ労働市場の改革など、個人の利己心、インセンティブがうまく発揮されることを重視していたことを論じる。王堂の思想としてプラグマティズムが強調されることが多いが、王堂自身はむしろ「プラグマティズムから功利主義に移った」という主張をしており、当時の日本にはプラグマティズムより功利主義の方が適切であると考えていた。湛山も同様に功利主義を強調しており、その背景の 1 つとして、こうした王堂思想の存在を考えることができ、湛山の経済思想にも影響していると言える。また、哲学科出身の湛山がなぜ経済学に興味を引かれていったのかを考える上でも、功利主義や利己心を中心とした英米哲学を王堂を経由して学んだことは影響が大きかったと言える。湛山は功利主義を旧弊を打破する現実的な社会改良の方法論として利用し、また私益と公益を結び付ける社会政策の思想として活用した。

第三章では、湛山の「小日本主義」の具体的な経済政策の分析として、湛山の米穀専売制論が論じられる。湛山の米穀専売制論は、外米輸入による生産性の向上と、国家管理による米穀統制の方法を組み合わせたユニークな政策思想であるが、背景にリカードの経済理論を想定していたことが指摘される。また、1920 年代の小日本主義では綿紡績業をリーディングセクターとして、アジア圏から食糧を輸入し、製品を輸出するという具体的な国際分業の形を考えていたことを指摘する。湛山の米穀専売制度論は、最終的な目的が国際競争に適応するための農業部門の縮小にあったことが最大の特徴であったと言える。また、理論的にはリストのような保護貿易の理論や関税で産業育成を図ろうと考えていたわけではなく、むしろ自由貿易擁護のリカードの理論を援用する形で工業化に誘導していこうと考えていた点に特徴があった。米穀流通の全面統制という政策論でありながら、価格メカニズムと生産者のインセンティブに害を与えないということを殊更に強調している点も特徴的で、現実にそれが可能であったかは置くとしても、湛山が社会機構を利己心の体系として認識しており、それに反するような統制は結局の所うまくいかないことを意識していたということが出来る。ただし、湛山も単に自由放任の上で国際競争を行えば良いと考えていたわけではなく、国際貿易に適応した均衡状態への移行の摩擦を軽減するために米穀専売制度のような制度が必要と考え、さらに日本の工業化へと誘導していく意図があったと言える。

第四章では大恐慌をきっかけとした湛山の貿易思想の転換が論じられる。1920 年代の湛山の経済思想は自由貿易が前提であり、世界貿易が正常に運営されていることが前提となっているが、大恐慌はその状況を変化させ、湛山も貿易論を一部修正している。湛山の自由貿易に対する見方の変化は、金本位制からの離脱の判断材料になり、また、リフレーション政策論につながった。湛山の貿易に対する思想は長期的な理想と、短期的な政策論の両面でとらえなければならないように思われる。湛山の自由貿易に対する長期的な理想は生涯を通して維持されたものであり、戦後においても 1959 年の訪中に見られるように、共産圏に対する貿易を行おうとするなど、理想の実現に対する努力として現

主　論　文　要　旨

れた。また、戦前においても、政治論においては常に国際協調派であり、長期的な理想として自由貿易が望ましいことは前提であった。その一方で、短期的な政策においては、1930 年代以降は現実的に自由貿易が難しい時代になっていることへの認識があり、それに対応した経済政策を主張していったということができる。

第五章では、湛山の物価論とリフレーション政策論が論じられる。湛山の物価論を 1910 年代から時系列的に追い、金輸出再禁止論までの湛山の通貨政策の目的は、物価の上昇というよりも、政府による外的な通貨政策の影響をなるべく排除することにあったことを指摘する。また、中央銀行制度改革私案に見られるように、湛山が中央銀行制度においても、中央銀行の独立性を軽視していなかったことを指摘する。

第六章では、復興期の湛山の経済政策論に対する分析を有澤廣巳との比較を通じて行う。有澤廣巳と石橋湛山はどちらも「傾斜生産政策」と関連付けられて論じられることが多いが、両者の政策にはかなり異なった部分があり、両者の考えていた経済復興のイメージと具体的な方法論の違いを論じる。

第七章では、戦後の経済政策思想として、湛山の完全雇用政策と労働に対する思想が分析される。湛山が通産大臣時代に唱えた完全雇用政策論は日本で最も初期のものであるが、それが湛山の労力を重視する経済思想と密接に結びついていることを指摘する。また、憲法の条項として知られる「勤労の義務」と復興期当時の湛山の労働に対する思想との関連を論じる。

湛山が取り組んだ経済思想上の課題はまさに自由貿易とナショナリズムの相克の問題であったということができる。晩年のインタビューで湛山は、「要するにナショナリズムは、資本主義と共産主義がいずれ一緒になるというときにも、なおかつ一番最後まで残る問題だ」と指摘し、戦後世界における最大の課題を「平和共存といまいったナショナリズムをどういうふうに調和させることだと思います」と答えている。これは自由貿易の理想を持っていた湛山が 1930 年代に大恐慌とブロック経済化に直面し、ケインズ主義的政策を取り入れていく過程を考えると、まさに経験から出た言葉であると言えるだろう。そして現代においても我々が直面し続けている問題だということができる。